「国語教育研究」第63号（令和４年３月刊）

米国における介入プログラムから見た読解力に困難がある高校生に対する指導の課題

登　城　千　加

１．問題設定

高校生も含め子どもたちの読解力低下が議論されるようになってから久しい。『高等学校学習指導要領解説国語編』（文部科学省、2018）においても、教科書の文章が読み解けない子どもたちの存在について述べられており、高校生の読解力は危機的状況にあるといえる。実際、筆者自身が日々の授業で目の当たりにする高校生の語彙力の乏しさは否定しようもない事実である。しかし、語彙力の不足がそのまま読解力の低さを意味するわけではないだろう。では、高校生の読解力低下の原因は何なのか。そして、読解力の困難さをどのように解消すればよいのか。この問いに明確な示唆を与えてくれる先行研究は、現状において決して多いとはいえない。そのため、高校段階における読解力の困難さについて明らかにし、読解力に困難のある高校生に対する指導のあり方を検討することは重要な課題となっている。

２．日本における読解力に困難がある高校生に対する指導の現状と課題

2022年度から実施される『高等学校学習指導要領』総則第５款（6）では、「学習の遅れがちな生徒」について、「生徒の実態に応じ、たとえば義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための指導を適宜取り入れる」（文部科学省、2018, p. 30）といった指導の工夫を求めている。これは、いわゆる学び直しを念頭に置いたものであろうが、初等教育段階の学習が身についていないことだけが、高校段階で求められる学力の不足を引き起こしているわけではない。

では、全ての高校生にとって必要な読解力とは何か。間瀬（2015, p. 32）は、PISA 型の読解力を視野に入れつつより高次な読解力指導のあり方を提案している。そこでは、

①　読みの構えを問う

②　本文を問う

③　テクスト世界を問う

④　書き手と読み手の関係を問う

⑤　テクスト世界と現実世界の関係を問う

という、５つの問いに基づく評価の枠組みが示されている。間瀬の提案は、具体的な読解アプローチを指導することでこれからの社会を生き抜く読解力の育成を目指す試みであるといえる。

この提案を参考に、筆者は2020年度１年生を対象として、１年間の現代文の授業において生徒の読解力向上を目指した評論文の指導に取り組んだ。この取り組みをとおして以下の課題が浮き彫りになった。

・客観的なアセスメントに基づき生徒の読解力の特性や困難さを明らかにし、それに応じて指導する方法が確立されていない。

・教師間においても、教師と生徒間においても、評論文の読解における明確な目標（ゴール）が十分に共有されていない。

これらの課題を解決するため、読解力向上に対する取り組みが進んでいる米国の介入プログラムからその示唆を得ることとした。

３．米国における読解力向上のための取り組みの概要

3-1. 読解力の向上に向けた海外での取り組み

読解力に困難のある子どもたちへの取り組みの代表的なものとして、マリー・クレイのリーディング・リカバリープログラムを挙げることができる。このプログラムは、初等教育段階の低学年の子どもたちの学力を保障する取り組みとして1970年代にニュージーランドで開発された。具体的には、読み書きに関する子どもたちの特性やニーズを方略に着目して把握し、子どもたちが主体的に文章の意味を確認したり吟味したりできるようになることを支援するものである。その後、リーディング・リカバリーは英語圏を中心に広く世界中へ普及していった（谷川、2003）[1]。

子どもたちの特性を方略に着目して捉えたうえで指導するリーディング・リカバリーは、リテラシーの向上に関する支援的なプログラムに方向性を与えるものであったといえる。米国では、2002年から「Reading First」プログラム[2]による州への助成が始まる。これは、小学校３年生までを対象として、リテラシーの向上を図るプログラムである。

このように、初等教育段階の子どもたちへのリテラシー指導は世界各地で展開されており、日本においても通級での指導を中心に様々な取り組みがなされてきた。

しかし、子どもたちのリテラシーを向上させるには、初等教育段階での指導だけでは十分といえない。米国では、2006年から中等教育段階の子どもたちを対象とした「Striving

Readers」プログラム[3]による州への助成が始まった。これは、当該学年より２学年以上読みの力が遅れている中高生（Striving Readers）を対象にしたリテラシー向上のための取り組みである。このプログラムでは、授業内でおこなわれる一般教育に対する介入と授業外でおこなわれる専門的な介入とを組み合わせた指導が実施される。実施にあたっては、大学等の研究機関が開発した様々な介入策が用いられた。

3-2. 米国におけるリテラシー観

米国の介入プログラムを検討するにあたり、まずは、米国におけるリテラシー観について確認しておく。米国では早くからリテラシー教育の重要性が叫ばれてきた。その背景には、グローバル化する社会を生き抜くために必要な高次のリテラシー能力が、ほとんどの生徒に身についていないという危機感があったからである。単に仕事を得るためだけではなく、政治参加や地域活動への参加など市民生活に必要不可欠な能力として、リテラシーの向上は公教育の重要な目標に位置づけられてきた（Heller & Greenleaf, 2007）。この切実なリテラシーへの希求が、読解力向上に対する米国と日本での意識の違いをもたらしたのではないかと考えている。

さらに、米国のリテラシー観において注目すべきは、リテラシー教育を段階的に捉えている点である。つまり、初等教育段階でおこなわれる基礎的なリテラシー教育を踏まえ、中等教育段階においては、領域や分野の内容を学ぶためのリテラシー教育を継続しておこなうべきだと考えられている。中でも Lee & Spratley（2010）は、中高生が文章を読解することに苦労する理由として、知識、トピックや文章構造に関する一般的な知識、読解がうまくいかないときの対処法、自分の読解力を把握する能力の４つが不足していることを挙げ、分野別リテラシーを学習するための支援が必要であることを指摘している。

3-3. 読解力のアセスメント

米国では読解力に困難のある中高校生に対して介入的な指導をおこなう際、公式、非公式に関わらず、読解力を客観的にアセスメントして生徒のニーズを理解する機会が必ず設けられている。アセスメントには、全米学力調査、各州において実施される読解に関するスクリーニングなどが用いられ、アセスメント結果に基づいて介入対象者が決定される。

アセスメントをとおして生徒の読解力を客観的に把握することは、個々の困難さに応じて焦点化した介入指導を可能にするため、読解力の向上にとって有効であると考える。

4．米国における読解力に困難がある中高生を対象とした介入プログラムの実際

4-1. 一般教育におけるリテラシー向上のための介入プログラム

中等教育段階におけるリテラシー教育について、Darwin & Fleischman（2005）[4]は以下のアプローチをとおして子どもたちのニーズに応えることを提案している。

・学校全体でリテラシーに焦点化し、専門家や指導者の育成を図る。

・相互指導やグラフィック・オーガナイザー、プロンプト・アウトラインなど、研究に基づいた一連の指導方略を用いて、全ての分野別教育において読解の成長を促す。

・読解力の不足が著しい生徒に対しては、専門家による集中的な介入プログラムを提供する。

・生徒が楽しんで読書に向かえるよう、本を選ぶ機会や授業の合間に本を読む機会を増やす。

・教科書の重要な事実や概念を紹介するために魅力的な補完的書籍を用意する。

・生徒のリテラシーのニーズを把握するために、公式および非公式の評価をおこなう。

・読書前の活動、読書中の方略活用によって、生徒が読書の過程をとおして背景知識を身につけ、意味を生み出すことを助ける。

また、中高生のリテラシー能力向上については、実践的なガイドブックも出版されている。たとえば、IES[5]に属する研究・評価機関であるNCEE（National Center for Education Evaluation and Regional Assistance）は、Kamilらによる『Improving Adolescent Literacy: Effective Classroom and Intervention Practices』（2008）を出版している。このガイドブックには、効果的な授業と介入プログラムの実践的なあり方について５つの提言が示されている。最初の３つの提言は、明示的な語彙指導、直接的かつ明示的な理解方略指導、テキストの意味や解釈について議論する機会を設ける方略、といった生徒がより多くの知識を得るための指導についての提案となっている。４番目の提言では、生徒が読書意欲を高め、自ら立てた学習目標に基づき、学習の過程を大切にするように、生徒のモチベーションとエンゲージメントに関することが指摘されている。これら４つの提言は、教える内容に関係なく、授業担当である分野別教育の教師が取り組むことを推奨している。５番目の提言は、通常の授業だけでは読解力の向上を図ることが難しい生徒に対する、強力で集中的な介入についての提案となっている。介入にあたっては、生徒の読解力を客観的かつ慎重にアセスメントし、音素認識、音素解読などの基礎的なスキルから、語彙を増やすための方略、読解に対する自己調整まで、個々のニーズに応じた介入を特別支援教育の教師が提供すること

を提案している。

4-2. 読解力に困難のある中高校生を対象とした「Striving Readers」プログラムの概要と成果

前述のとおり、米国では2006年から中高生を対象とした「Striving Readers」プログラムによるリテラシー向上への取り組みが始まった。さらに、2015年以降、「Striving Readers」プログラムによる効果の検証もおこなわれている。Boulay ら（2015）[6]は、「Striving Readers」プログラムで助成を受けた17の研究において実施された10の介入プログラムについて、その有効性を検証している。以下に、有意な正の効果が認められた３つの介入プログラムの概要を示す。

・「READ 180」

概要：ヴァンダービルト大学とフロリダ州の Orange County Literacy Project によって開発された介入プログラム。学年レベルより２学年以上読解力の遅れが見られる生徒を対象とする。流暢性の指導、グラフィックオーガナイザーの使用、予備知識の活用などについて、クラス全体での授業の後、小グループで指導、演習をおこなう介入を１年間継続するように設計されている。

成果：３つの研究において、読解力に有意な正の効果が認められている。

・「Xtreme Reading」

概要：カンザス大学学習研究センター（KUCRL）が開発した「The Strategic Instruction Models Learning Strategies Curriculum（SIM）」をベースにした補助的な介入プログラム。障害の有無に関わらず、読解を苦手とする９年生から12年生を対象とする。単語識別方略、自問自答方略、視覚的イメージ方略、言い換え方略、推論方略の５つの読解方略に焦点を当てた介入が設計されている。

成果：１つの研究において、読解力に有意な正の効果が認められている。

・「Learning Strategies Curriculum（LSC）」

概要：カンザス大学学習研究センター（KUCRL）が開発した「The Strategic Instruction Models Learning Strategies Curriculum（SIM）」の一要素として開発された介入プログラム。学習障害のある６年生から９年生を対象とする。課題別学習方略と自己調整プロセスを身につけることが主要な目的である。「習得」「記憶」「表現」を柱に、それぞれに該当する方略を指導する１年間の介入が設計されている。

成果：１つの研究において、読解力に有意な正の効果が認められている。

4-3.「Striving Readers」プログラムの実際

ここからは、「Striving Readers」プログラムの助成金を受けた研究のうち、Boulay ら（2015）の検証によって有意な正の効果が報告されている「Learning Strategies Curriculum（LSC）」を用いた研究について詳しく見ていく。

Cantrell ら（2011）[7]は、ケンタッキー州の農村部にある21校（中学校10校、高校 9 校、6-12年生学校 2 校）の、Striving Readers に該当する生徒と教師を対象に、カンザス大学学習研究センター（KUCRL）が開発した「Learning Strategies Curriculum（LSC）」を実施し、その成果について検証している。「LSC」は、学習障害のある中高生を支援するために開発された学習方略カリキュラムである。「LSC」は、「習得」「記憶」「表現」の 3 つのストランドから構成されている。「習得」は、テキストから情報を得ることの支援が目的であり、「単語識別」「視覚的イメージ化」「自己質問」「言い換え」などの方略が指導される。「記憶」は、重要な情報を識別し、整理し、記憶することの支援を目的とし、「記憶術」などの方略が指導される。「表現」では、作文とアカデミックな能力を支援することが目的とされ、「課題完成方略」などが指導される。方略の指導にあたっては、モデルを見てから、口頭で練習し、コントロールされた練習をおこなった後、フィードバックをおこない、ポストテストをして、一般化する、という段階を通じた指導がおこなわれる。介入群の生徒は、週に250分以上「LSC」に参加した。

また、学校全体に対する介入として、CTL（Collaborative for Teaching and Learning）[8]が開発した「ALM（Adolescent Literacy Model）」が用いられた。「ALM」は、「Kentucky Academic Standards」に準拠して開発された、中学・高校の全ての分野・領域のリテラシーを統合する包括的なリテラシーアプローチである。介入にあたっては、段階的に指導内容を高度化し、4 年間をとおして全ての方略が指導されるよう設計されている。

これらの介入の結果、「LSC」の介入を受けた生徒では、9 年生の読解力、6 年生の読解方略の使用、9 年生と 6 年生の読解意欲について有意な成果が見られた。ただし、この介入によって特別支援教育を受けてはいないが読解力に困難のある生徒に最も効果が見られ、特別支援教育を受けている生徒にはあまり効果が見られなかったと報告されている。

5．カンザス大学学習研究センター（KUCRL）による介入プログラム

5-1.「Strategic Instruction Model（SIM）」の概要

KUCRL は、学習リスクが高い中高校生のリテラシー向上を目指した「Xtreme Reading」や「LSC」などのような介入策の開発を積極的におこなっている。2011年には多様な学習

者のニーズに応える総合的な学習モデル「Strategic Instruction Model（SIM）」を開発し、その成果を報告している[9]。この学習モデルでは、学習に困難がある生徒だけでなく成績優秀な生徒も含め全ての生徒にとって有効な指導となることを重要視している。また、単にテストの成績を向上させるだけでなく、学習した技能や方略を学校外の環境においても活用できるように一般化するところまでを目指した指導過程や指導上の決まりが体系的に整理されている。

この学習モデルは、以下の２つの介入を中心にして構成されている。

・教師に焦点を当てた介入

障害のある生徒も含め多様な学習者に対して、より理解しやすく、記憶に残るよう、情報を選択して提示することに焦点を当てた介入（Content Enhancement Routines）。

・生徒に焦点を当てた介入

障害のある生徒に対して、必要なスキルや学習方略を指導することに焦点を当てた介入（The Learning Strategies Curriculum）。

これらの介入は、次に示す５つのレベルに基づいて介入者、介入内容が規定されている。

レベル１：一般教育の教師は、全ての学習者にとってわかりやすい方法で学習内容を提示する。

レベル２：学習を成功させるための方略を直接かつ明示的に指導し、学習スキルを身につけさせることに焦点を置く。

レベル３：一般教育での要求を満たすために、幅広い学習方略の活用を特別支援教育の教師によって集中的に指導する。

レベル４：深刻な読み書き障害のためにデザインされた指導を集中的におこなう。

レベル５：１対１、もしくは少人数のグループで、言語療法をおこなう。

レベル１と２が「教師に焦点を当てた介入」に該当し、レベル３以降が「生徒に焦点を当てた介入」に該当する。

5-2. 教師に焦点を当てた介入における指導の決まり

「教師に焦点を当てた介入」では、障害のある生徒も含め多様な生徒を指導するにあたって、次に示す指導の決まりが設定されている。

・学習計画と指導のための決まり

教師は、コースやユニット、レッスンに関する重要な考え方や学習の仕方を示し、学習に対する心構えを醸成するための指導をおこなう。

・テキストやトピックを探求するための決まり

生徒が重要な概念に対するトピックの重要性を探ることで単語やフレーズの意味を習得することを支援する。また、抽象的なトピックについて具体的に考えるよう促し、情報間の関係に着目することを支援して、読解力や思考力の発達を促す指導をおこなう。

・概念を教えるための決まり

新しい概念を生徒にとってなじみのある概念として定着させること、重要な概念を比較対照すること、主要な概念を定義づけ、それをより大きな知識の中に位置づけること等を指導する。

・学習成果を向上させるための決まり

授業をとおして理解したことを図式化するよう指導する。また、質の高い課題を与え、生徒とともに課題を評価する。

5-3. 生徒に焦点を当てた介入における方略指導のあり方

一般教育における学習では十分に成果を上げることができない生徒に対しては、特別支援教育を専門とする教師が集中的で明確な指導とサポートをおこなう。その指導のうち、文章読解に関連して指導される方略を次に示す。

・推論方略…文章中における情報間の関連性に着目し、推論に対応する質問をする。

・言い換えと要約の基本…文章のトピックや主旨を特定し、自分の言葉で表現する方法を学ぶ。

・言い換え方略…文章中の最も重要な情報に焦点を当て、その内容を自分の言葉で言い換える。

・自己質問方略…頭の中で質問をつくり、その質問の答えを予測し、読みながらその答えを探すことで読書への動機づけにつなげる。

・視覚的イメージ方略…文章から読み取った内容を頭の中で映像化する。

・単語識別方略…教材中にある未知の単語を読み解くために、接頭辞、接尾辞、語幹を識別し、３つの短い音節規則に従って発音する。

他にも、読解力向上に焦点化した補習コースが設計されている。このコースでは、活用度の高い読解方略を数多く教えることができるように設計された Fusion Reading プログラムや、読解のプロセスにおける個々の方略の役割を理解できるように特定の読解方略を教える STRUCTURE Your Reading を用いた指導がおこなわれる。

また、方略の指導にあたっては、８つの段階が設計されている。

第１段階：プレテストとコミットメント

学習課題への取り組み方における長所と短所を把握するためのテストを実施する。

第２段階：説明

方略の本質と方略活用の利点、方略のステップを説明し、生徒の学習目標を設定する。

第３段階：模範

教師が方略の全てのステップを実際に活用する様子を見せる。

第４段階：口頭練習

生徒に方略のステップを説明し、名前をつけ、方略の定義を詳しく説明するよう促す。

第５段階：コントロールされた練習とフィードバック

簡単な教材を使って方略を練習させる。その後、個別にフィードバックを与える。

第６段階：高度な練習とフィードバック

通常の授業で使われる高度な内容を含んだ教材を使って方略を練習させる。このとき、細かい指示はあまり出さない。生徒に自身の学習成果を分析させる。

第７段階：ポストテストとコミットメント

第１段階で使用したものと同様の教材と手順で、方略学習の進捗を評価する。生徒に自分の進歩を分析させ、新しい場面で新しい方略を使うことを約束させる。

第８段階：一般化

方略を活用する適切なタイミングを認識させる。その後、具体的な課題を与えて様々な場面での活用を練習させる。さらに、他のタイプのタスクに適応させる方法を指導する。最終段階をクリアすると別の方略指導へと移る。また、生徒が方略を継続的に活用しつづけているかどうかについて定期的にチェックする。

６．日本における読解力に困難がある高校生に対する読解指導の改善に向けて

前述のとおり、日本では読解力に困難のある高校生に対する介入的な指導についての研究が進んでいるとは言い難い状況である。今後、読解力に困難のある高校生に対する介入的な指導のあり方について研究を進めるにあたり、まずは、分野別リテラシーの観点から評論文の読解指導を捉え直す必要がある。そのためには、生徒と教師や教師間でリテラシー観を共有することが重要な鍵となるだろう。

また、読解力に困難のある高校生に対する指導のあり方を構想するにあたっては、米国における介入プログラムを参考に、生徒の読解力や読解における特性を客観的に把握するためのアセスメントツールを開発しなければならない。そのうえで、アセスメント結果に基づいて、個々の特性に応じた読解方略を精選することや、体系的な指導の枠組みを整理

することに取り組んでいきたいと考えている。

注釈および主要引用・参考文献

1　谷川とみ子（2003）「M.M. クレイのリーディング・リカバリー・プログラムに関する一考察：英語圏における読み書き能力の回復指導」『京都大学大学院教育学研究科紀要』49, pp. 181-193

2　「Reading First」は、「No Child Left Behind Act（2001）」に基づき決定された州への助成金プログラム。科学的に根拠のある読書指導を用いて、幼稚園から３年生までの子どもたちの読解力向上に取り組んだ。

3　「Striving Readers」は、2006年から始まった州への助成金プログラム。６年生から12年生のリテラシーの向上を図るため、ターゲットを絞った集中的な介入と学校全体への介入の両方をおこなう。2018年以降、出生から12年生までを対象とした「Striving Readers Comprehensive Literacy Program」包括的なプログラムが始まっている。

4　Darwin.Marlene, Fleischman.Steve（2005）「Fostering Adolescent Literacy」『Educational Leadership』62, 7, pp .85-87

5　IES: Institute of Education Sciences の略。米国教育省の統計、調査、および評価部門。教育の実践と政策の基礎となる科学的証拠について、教育者や研究者、保護者など幅広くアクセスできる形式で情報を提供する機関。NCEE をはじめとする４つの組織をもつ。

6　Boulay.Beth, Goodson.Barbara, Frye.Michael, Blocklin.Michelle, Price.Cristofer（2015）『Summary of research generated by Striving Readers on the effectiveness of interventions for struggling adolescent readers』NCEE

7　Cantrell.C.Susan, Almasi.F.Janice, Carter.C.Janis, Rintamaa.Margaret（2011）『Striving Readers Final Evaluation Report: Danville, Kentucky』Collaborative Center for Literacy Development University of Kentucky

8　CTL（Collaborative for Teaching and Learning）幼稚園から高等教育までのリテラシー、コンテンツ指導のあり方について研究、情報提供をおこなう非営利団体。

9　The University of KansasCenter for Research on Learning（2011）『The Strategic Instruction Model in support of secondary literacy』

（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）